

【書評・紹介】

久岡加枝 著『グルジア民謡概説 <sup>うた</sup> 謡に映る人と文化』

(東京、株式会社スタイルノート、2020 年 8 月、A5 判、316 頁、3200 円+税)

甲 地 利 恵



ついに出了！ グルジア民謡の概説書である。

評者はグルジアとグルジアの伝統的な多声合唱が個人的に大好きで、音楽を主軸にグルジアの歴史と文化の一端を知ることができるコンパクトな入門的概説書を待ち望んでいた。これまで国内で得られるグルジア音楽情報には限りがあり網羅的とは言いがたく、歯痒い思いをしていた。それが、民謡ジャンル、形式、地域それぞれの音楽的特徴、グルジア国内の合唱活動の概況、参照すべき音声資料一覧や演奏家紹介など、知りたい情報がほぼこの一冊に。

著者の久岡加枝氏は、大阪大学大学院文学研究科博士課程を修了され、2020 年現在は同大学の招聘研究員。修士課程を北海道大学大学院（スラブ社会文化論）で修められており、本学会員の中にはご縁のあるかたもいるだろう。

2014 年のグルジアと日本の両国首脳会談での要請を受けて日本では 2015 年から国名としての「グルジア」を「ジョージア」と表記することになった。とはいえ「グルジア語」「グルジア文字」「グルジア料理」「グルジアワイン」などのように慣用されてきた語は、現状では必ずしも一律に「ジョージア」に置換えられているわけでもないようだ。本書でも「グルジア/ジョージア」の語源諸説、自国語での自称である「サカルトヴェロ」についても言及がある。自称が望ましいのかもしれないが、日本が英語圏では Japan と呼ばれるように、よほど問題のない限り国名は相手方の言語での慣用に委ねられることが多い。国名は「ジョージア」で徐々に定着していくだろうが、一方で日本国内での慣用慣例を踏まえると、いろいろと悩ましいところだろう。著者の久岡氏は「どの名称を用いるかは判断の難しいところだが、古い起源をもつ「民謡」を扱う本書では、同じく古い「言語」などの名称にならい「グルジア」という旧来の国名・民族名を用いる」としている。著者の意向に沿い、本評も以下「グルジア」「グルジア民謡」で進めよう。

では、本書の構成（目次）を紹介しよう。『グルジア民謡概説』と題しながらも、民謡の話題だけに止まらず、広くグルジアの歴史や文化について知ることができる内容であることがわかる。

本書について

サンプル音源について

はじめに グルジアについて

国土を横断して共有する合唱文化

歌にまつわるグルジア小史

第1章 各地方の民謡紹介—多様性と共通性

コラム1 合唱による民謡—主要な四分類

1. 諸地域の民謡

2. 都市の民謡

コラム2 グルジア民謡における詩の形式

コラム3 グルジアの楽器

3. 北コーカサス諸民族の民謡—グルジアとの共通性を踏まえて

第2章 民謡の歌詞とそのテーマ—宗教・歴史・文化など

1. 生活・風俗に関するもの

コラム4 グルジア・ワインについて

コラム5 グルジア映画のなかの民謡

2. 農業・自然に関するもの

3. 宗教的儀礼に関するもの

コラム6 グルジアの神話について

コラム7 グルジア正教会の年間行事について

4. 婚礼に関するもの

コラム8 グルジアの結婚式について

コラム9 グルジアの舞踊について

5. 恋愛に関するもの

コラム10 グルジア民謡における恋愛と詩人の創作について

コラム11 グルジア語名詞の語尾について

6. 生活苦・一揆、嘆き、教訓を歌ったもの

7. 武勇・戦に関するもの

コラム12 格闘技を通じた日本との身近な接点

8. 19世紀以降の創作によるもの

コラム13 19世紀の知識人と民謡

第3章 代表的な民謡歌手と演奏グループ—録音案内つき

1. 代表的な民謡歌手

2. 代表的な演奏グループ

3. 録音資料—CD およびストリーミング

あとがき

付録 楽譜

付録 用語集

索引

人名索引

「サンプル音源」計 21 曲は専用のウェブサイト（本書内に QR コードが記されている）で視聴できるようになっている。採録年月日のクレジットは見当たらないが、久岡氏

のグルジアでの調査中に記録されたものと思われる。サイトにアクセスすると各地方の民謡の特徴がよく現れた演唱や伝統楽器の演奏を聴くことができる。それにしても、古くは“ソノシート”付録本やカセットブックから CD ブックに至るまでを現物で知る評者には、いよいよ付録メディアなしの音楽本の時代かと、この点だけでもすでに感慨深い。

さて、第1章では、グルジア民謡全般を視野に入れての音楽的特徴の解説や、各地方の民謡の特色について紹介がなされる。グルジア民謡と一括りに言っても、北海道（83450 km<sup>2</sup>）よりも小さい国土（69,700 km<sup>2</sup>）の中に、地方によってさまざまな音楽様式があり、レパートリーも豊富で内容も多岐に渡り、また複数の民族や言語や文化が息づいていることが解説されていく。グルジア民謡としては 2001 年にユネスコの無形文化遺産リストに記載されることになった、いわゆる多声（ポリフォニー）の形式で歌われるものが比較的よく知られているだろう。本書では単声（独唱）の民謡やグルジア伝統楽器による音楽も紹介されるが、やはり多声による民謡の比重が圧倒的に大きい。グルジアの伝統的な合唱といえば男声合唱がクローズアップされることが多いが、女声や混声のアンサンブルも行われている。近年では出身地域を超えてグルジア全国の民謡をレパートリーとするグループも少なくないようだ。合唱する民謡といわれてもすぐにはイメージしにくい方もいるかもしれない。ぜひ本書を手に取りサンプル音源を聴いて、さまざまな合唱する民謡の中の一つであり、かつ豊かな多声音楽として古来多くの人々を魅了してきたグルジア民謡を味わってみよう。完全 1 度・4 度・5 度でメロディが終止するときの、空間的な広がりを感じさせる独特の響き。声帯をやや緊張させながらも伸びやかに響く胸声を基調としたハーモニーと、そこから聞こえてくる微かな倍音。グルジア地方の民謡では「クリマンチュリ」と呼ばれる、(ムズムズするほど) 快いファルセットと地声との絶妙な行き来も味わえる。

第2章では、グルジア民謡を歌詞の内容別に分類し、日本語訳で紹介するとともに、これらの歌の背景となる歴史や逸話などが解説される。評者はグルジア語もわからないのにグルジア民謡の音だけを味わっていたので、おかげで「なるほどそういう歌だったのか」と、遅まきながら新たに学ぶことができた。欲をかって言えば、グルジア文字（まるでダンスをしているように見える可愛らしく丸っこい文字だ）での原詞とそのローマ字表記と訳詞が3列で揃っていれば個人的にはより嬉しかったが、概説書・入門書としての本書としては訳詞だけでも目的は十分に果たせるだろう。むしろ本書をきっかけにグルジア語原詞も知りたいと思う読者が増え、グルジア語学習者が増えればそれに越したことはない。

さまざまな切り口からグルジア文化を紹介していくコラムも楽しくためになる。コラムだけを順に読んでいっただけでもかなりのグルジア通になれそう。付録の用語集とも併せてグルジア民謡豆知識を広げていける。語尾に「ゼ」や「シヴィリ」がつく苗字が多いなあとは思っていたが、そういうことなのか！ とか、グルジア民謡にしよっちゅう出てくる「アリロ」「アララリ」「ナニナ」とかの言葉はいったい何だろうと思っていたが、そういうことなのか！ など、評者がこれまで漠然と抱いていた素人っぽい疑問のいくつかが解決され、すっきりできた。

そしてグルジア民謡ファンはもとより、初心者にとって格好の、音へのガイドとなる第3章。グルジア民謡の無数の歌い手の中でもとりわけプロ・セミプロとして著名な歌手やグループと、それらの歌手・グループによる演奏が収録された音源が紹介される。音源については CD などの媒体で発行されたものだけでなく、You Tube や Spotify など、インタ

ーネットで視聴できるもの（映像を含む）も豊富に紹介されている。ネット上で自由に聴ける投稿音源にはそれこそピンからキリまであるが、そこはグルジア民謡を実地で深く知る久岡氏のセレクションなので、読者は効率よく「これぞ」という演奏にたどり着ける。一つ一つ全部じっくり聴きたいが相当な数なので、実は評者もまだ全てを視聴できていない。ネット上の音源はいつの間にか消去されるものも少なくないので、早めにアクセスしておきたい。本書で紹介されているだけでも、数あるグルジア民謡の記録のうちのほんの一部である。それだけ数多くのグルジア民謡の、各地の、各ジャンルの担い手（ソロでもグループでも）がいて、自らの音楽文化として生き生きと伝えており、さらにはインターネット世代の歌手らが（世界に向けて）発信している、という状況も垣間見えてくる。

巻末には付録として久岡氏の採譜によるらしいグルジア民謡の楽譜が 16 曲、掲載されている。これで読者は、読んで、知って、聴いて、さらには自分で歌って体験することまでできるのである。楽譜が読めなくても、この楽譜の性格は規範としての楽譜ではなく実演からの記述的楽譜に近いものであるから、譜面に拘らず、紹介されている参考音源を頼りにいわゆる耳コピを優先して歌ってもよいだろう。グルジア語の歌詞はローマ字で表記されており、発音については初心者でも体験できるよう、歌唱時の実用的な発音アドバイスも記されている。堅苦しくなく「(発音が) 難しい場合は\*\*の音でもよい」などの提案は（もしかしたら言語学者にはお叱りを受けるのかもしれないが）、歌唱の中での発音は必ずしも発話時と同じにはいかないことも踏まえ、「まずは歌って知る」「歌う体験を通して知る」という目的のためには親切かつ現実的、現場的なアイデアである。久岡氏自身が現地で実際に歌を教わった体験の裏づけがあるからこそ、歌唱として許容される範囲を踏まえてのこうした提案ができるのだと言えよう。なお、少々難をいえば拍子記号の算用数字に誤記かと思われるものもいくつか見受けられたが、読譜に大きく支障を来すほどではなかろうから、第2版（きっと出ることを期して）で訂正していただくとしよう。

本書はタイトルのおお概説であり、一般向けに書かれたグルジア民謡入門書として、また広くグルジアの歴史や文化に興味を覚えた人のためのガイドブックとして、長期的に参照されていこう。本書によってグルジア音楽の魅力にハマってしまう日本語圏の読者が増えるであろうことを、一人のグルジア民謡ファンとして願っている。

欲をいえば、その音楽を今も受け継ぎあるいは創り出している人々の姿を、より具体的に知ることのできるような、フィールドワークを実践した久岡氏だからこそ出会えた音楽エピソードについても知りたい。調査時の状況、歌手らの音楽的バックグラウンドや職業、誰からどのように習ったか、普段どのくらい「民謡」を歌うものなのか、民謡以外の音楽経験の有無、三部合唱の各パートのどれを歌うのかはどうやって決まるのか、知っている曲ならどのパートでも臨機応変に歌えるものなのか。いわゆるハーモニーの状態を作り出すタイプの自国自民族の民謡というものに実体験を欠く評者などは、ポリフォニー歌唱に生まれた時から親しんでいる文化の人々のそのような感覚を、知りたくてたまらない。

おそらく久岡氏も、本書で描ききれなかったグルジア民謡ないしコーカサス地域の音楽の世界の深さ豊かさを伝える次の著作に向けて鋭意準備されているのではないか。あるいは本書に触発されてグルジア音楽研究を志す次世代が増えていくかもしれない。今後の展開を大いに期待してしまう、楽しい1冊であった。

（こうち・りえ／北海道博物館アイヌ民族文化研究センター）